
僕の友達

その他

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の友達

【Nコード】

N6080R

【作者名】

その他

【あらすじ】

幽霊との友情を描いた残念な小説。

(前書き)

どうも。はじめましての人は初めまして。

その他と申します。

この小説は作者の自己満足と妄想で出来ています。

そういうのが不快な人は戻るボタンを押して退出してください。

(この小説の主人公は他小説で出るかもよ?)

※8月27日 改稿しますた。

内容が大幅に変わっています。

前のほうが好きだった方、ごめんなさい。

始めまして、か？

自分は峰岸智。みなぎしさとる

七市乃高校に通う学生だ。

自分はとある部活に入っている。

活動内容は都市伝説を科学の力で解明しようというものだ。

名前は都市伝説説明部。

略して都解なんて呼ばれてる。

（ちなみに部員は自分一人だ。先輩方が卒業して、いきなり寂しくなってしまった。早く部員集めなきゃな……）

自分はずつと幽霊とかが見えていた。

だから、自分の見えるものが偽者だと言って欲しかった。

いやまあ、否定しなかったただけなんだけど。

（実際、自分の周りにいた霊は皆、見えるだけで喋れないし触れなかった。だからまだ否定できた）

ただ、自分は本物の幽霊と言うものを信じざるを得なくなった。

幽霊は存在する。

って言うか身近にいる。

ネタに走ればきつと

‘あ：ありのまま、今起こったことを話すぜ！’となるのだろうか。
今回はそのきっかけになった出来事のことを話そう。

あれは今年の六月ごろ、まだ梅雨だったため雨が降っていた。

そんな中、自分は一人でパソコンに向かって調べ物をしていた。
もちろん都市伝説のことだ。

いつものようにネットを立ち上げ、掲示板を開く。

今日は七件新しい噂の書き込みがある。

その内六件がイタズラだった。

おそらく、恥知らずな誰かが面白半分で書き込んだのだろう。

残り半分は嘲りだろうか。

そんなことを思いながらとりあえず叩いておく。

『クソスレ乙ww』っと……。

だが一件だけ気になる書き込みがあった。

『私は本当に見たんです……電車の中で女の子が蹲っていました……』。

でも、皆気付かないんです……私にしか見えなかったんです……

友達も見えないと言っていました……とても怖いです……

このままでは、私は学校に行けません……嘘だと思うなら○○線の八号車両に乗ってみてください……あなたが見える人なら、あの子が見えるはずです……』

……○○線か。自分が乗る電車だ。

丁度いい。ついでに八号車両に乗って確かめよう。

もし見えたら、話してみようか。なんてね。

数時間後。

駅のホームに立ち、電車を待つ。

ホームに人影は殆どなかった。

開いたドアから八号車両に乗り込み、空いている席を探す。

……おかしい。人がいないのだ。

いつもなら帰宅ラッシュで立っているのもやっとなのに。

今日に限って誰もいないなんて。

冗談だろうか？

いや、一人だけいた。

叫んで掴まれている腕を振り解く。
傍にいたら危険だ!!!!

そう判断し、踵を返して逃げ出す。

しかし背後から

『何処行くの？ 一緒にお話しようよ』

と声が聞こえてくる。

急いで走って車両を移動する。

しかし、七号車両にも人はいなかった。

何故だ???!!

後ろを振り返る。

『何で逃げるの?』

と言いながら滑るように近づいてくる。

(捕まる!!!!)

そう考えた僕はまた走り出す。

しかし六号車両にも五号車両にも誰もいない。

しかも駅に付く様子も無い。

幽霊はと言うと

『何で逃げるの?』

相変わらず同じことを言いながら追いかけてくる。

クソッ!

ホントにこの電車で動いてんのか?!

結局、自分は第一車両まで追い詰められた。

『どうして逃げるの？ 私、何もしてないのに』

「怖いからだよ!」

恐怖でテンパっていた自分は幽霊に思わず突っ込んでいた。

「お前、自分の見た目わかってるのか?! それスゲー怖いぞ!」
矢継ぎ早に口走る自分。

このときばかりは頭がどうかしてたと思う。

ただ、この後の幽霊の反応にはビックリさせられた。

『ヒック……うう……』

なんと、泣き出してしまったのだ。

まあ、罪悪感は無くも無い。

なんとなく居心地が悪くなる。

『気にしてるのに……』

「気にしてるのかよ！」

いかん。また突っ込んでしまった。

『しょうがないでしょ！ 私じゃどうしようもないんだから！』

「キレるなよ！」

何だコイツ。

泣いたりキレたり、妙に人間くさい。

幽霊が落ち着いた頃を見計らって話しかけてみる。

「で、だ。何故自分に近づいてきた？ 理由は？」

『あのね？ 怒らないで聞いて欲しいんだけど』

「キリキリ話せ」

『はいっ！ 私は見ての通り死んでおります！ それで今まで誰にも見られなかったのであります！ ずっと一人は寂しかったのであります！』

ノリがいいな。

「で、声をかけた自分と話したかったと？」

『その通りであります！ グンソーどの！』

「ふざけるな」

『ごめんなさい』

なんだコイツ。話してみると結構面白いぞ。

見た目はともかく。

「ん？ なんで成仏しなかったんだ？」

『未練が残ってたからだよ。私はずっと一人ぼっちで寂しかったか

らね。最期に誰かと楽しくお喋りしてみたかったんだよ』

「友達とかは？」

『いなかったよ』

「リアルにボッチじゃんww」

『笑ったな?! 私を笑ったな?! そういうあなたはどうか
すか!』

「いねーよ」

『ハッ! それじゃ私を笑えないじゃないですか!』

「友達がいらないんじゃない。作らないんだ。人間強度が、下がるか
ら」

『どこのラギさんですか?!』

おお、このネタを知ってるとは。

さてはお主、オタクだな?

『オタクじゃありません!』

しまった。声に出てたか。

それから、自分はいつのまにか幽霊と雑談をしていた。

結構話が合うから、かなり笑えた。

自分がおちよくって。

幽霊がキレて。

バカ話して。

一緒に笑って。

ふざけて。

調子に乗って。

そんな時間が終わりを告げたのは、彼女の一言がきっかけだった。

『私、君とあえてよかったな』

「ん?」

『未練、果たしちゃった』

幽霊の体が淡く光っている。

「おいっ?! それ、大丈夫なのか?!」

『大丈夫だよ。これは成仏するときに出る光だから』

「お前……」

『フフッ。ありがとう、サトル。君と喋れて、私はとっても楽しかったな』

「そっか……」

『そ。もし、生前に会えたらって凄く残念だったもん』

「ああ。自分も楽しかった。お前とは友達になれると思ったんだけどな……」

『うん。私もだよ。でももう行かなきゃ』

「じゃ、最後に一つ。頼んでいいか?」

『なに?』

「名前。教えてくれ」

『交新院霊香だよ。交わるの交に新しい、病院の院、幽霊の霊に香りの香』

「そうか。じゃあ、レイ。さよならだな」

『うん。さよなら』

そう言っ、彼女は。レイは、静かに消えていった。消える直前に見せた微笑は、とても印象深かった。

「えゝ次はゝ終点ゝ終点ゝ」

気がつく。

自分は八号車両の座席に座り、駅員のアナウンスを聞いていた。なんだか寂しい気もするが、しかたない。

彼女は幽霊なのだから。

いつか、成仏するのだから。

そう自分に言い聞かせて、この日は家に帰った。

ここからは後日談だ。

今回のオチと言いつてもいい。

翌日の日曜日、散歩をしようと外に出たところ。

玄関にレイがいた。

「あれっ?! お前?!」

『ああ、うん。新しい未練、できちゃったみたい』

「なんだよ新しい未練って!」

『君』

「は?!」

『だから、君の事をもっと知りたいって思った』

「って、おい!」

『フフツ。これからもよろしくね? サトル』

「ふざけんなー!!」

こうして、今も自分の隣にはレイがいる。

バカ話して、笑って、怒って。

彼女は生きている人間と変わらない。

顔色の悪さは気にかかるが。

そうそう。あの生気の無い目は、今はキラキラ輝いている。

どうやら、友達と言う関係がよほど嬉しいらしい。

今だからこそ言える。

幽霊を、完全に否定しなくてよかったと。

(レイいわく、心から否定すると幽霊は見えなくなるそうだ)

そんなこんなで。

自分とレイは、今日も楽しく友達をしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6080r/>

僕の友達

2011年8月28日13時10分発行